

宇摩と法皇山脈



《法皇山脈》

四国中央市を東西に走る法皇山脈。

法皇山脈の名前の由来は、平安時代、白川法皇が京都に寺院を建立する際に、宇摩地方のこの山から献上した木材が非常に優れていたということで、「法皇」の名をつけることを許されたという説をはじめ、諸説あります。

菜の花やコスモスで有名な翠波峰、カタクリの花で有名な鋸山、おといこさんで有名な豊受山、川之江小学校から見える山としては最高峰の赤星山（1453m）などを望むことができます。

宇摩地域は、瀬戸内海気候のため昔から水不足に悩まされてきました。江戸時代末より、法皇山脈の北側を流れる銅山川の水を法皇山脈を越えて引く計画がありました。1855年のことです。それから95年、法皇山脈を越えて銅山川の水が宇摩平野に流れたのは、1950年のことでした。この銅山川疎水により、四国中央市の農業や工業は発展してきました。

《宇 摩》



四国中央市はかつて「宇摩」と呼ばれていました。

「宇摩郡（うまのこおり）」という地名が初めて文献に見えるのは、7世紀の初めです。「宇摩」は、1300年以上続く歴史のある地名なのです。それ以前は、馬評（うまのこおり）と呼ばれていたのではないかとされています。

「馬評」と呼ばれるようになった由来として、一説には、古代、金生川や銅山川で朱金や砂金などを集めていた百済からの渡来人が馬をたくさん飼っていたからだという説もあります。彼らは馬についての知識もあり、その飼育も心得ていたので進んで馬を導入利用していました。地方の人びとは驚異の目で眺め、誰とはなしに馬のいる評（郡）、馬評（郡）と呼ぶようになったのではないのでしょうか。

そして、713年に詔が出され、郡郷里名を二文字の好字にするという動きがありました。つまり、この時期に「馬」が「宇摩（麻）」に変わったと考えられます。

また、「古事記」に宇摩志葦牙彦舅尊（うましあしかびひこじのみこと）と宇摩志麻治命（うましまちのみこと）の二人の「宇摩」の文字が使われている神が登場します。「宇摩」という地名はこれらの神の名の「宇摩」をとったという説もあります。

ただ、資料がほとんどなく、正確なことはわからないのが現実です。